



教室の窓辺

自分たちで創り上げる喜びを

愛知教育大学附属岡崎中学校

教諭 川村 大樹

本校は開校以来、子どもを真ん中において「はじめに子どもありき」の教育を実践し続けています。各教科の授業では、身の回りの事象から抱いた興味や関心をもとに学びを進め、自分で調べたり、取材したりしてまとめた考えを積極的に伝え合う姿が多く見られます。そうした日常的な取り組みの延長にある宿泊行事においても子どもの思いを大切にし、未知の問題に対して果敢に挑戦する姿を目指して実践に取り組んでいます。その中で、私が3年間持ち上がりで担当している現3年生が2年生の時に実施した自然体験活動について紹介させていただきます。

自然体験活動に向けた学年集会で「行き先、活動はあなたが決めてください」と伝えました。子どもは、想定を超えた教師の言葉に「自由すぎるでしょ」と叫んでいましたが、その発言とは裏腹にうれしそうな表情を浮かべていました。最初に行ったのは、1年時でのオリエンテーション合宿で得た課題の整理でした。「仲間と協力して楽しめたが、まだ足りない」という意見に全員が共感し、自然体験活動で「真の楽しさを味わいたい」という思いを共有しました。その後、実行委員を中心にねらいに沿った活動や、活動に適した

場所を考え、学年集会で提案しました。議論を重ねた結果、行き先は海と山に囲まれた福井県のブルーパーク阿納に決定しました。

メイン活動は、自分たちで製作したいかだに乗って海に漕ぎ出す「いかだフェスティバル」に決まりました。子どもは「どうすれば丈夫で、安定したいかだを製作できるか」という問題を追究し始めました。「材料は竹がいいよね」「どうやって固定しようか」など、設計図を考え、試作品を製作したり、何度もブルーパークの方と連絡を取って海の状況を確認したりしました。3月には、学校のプールに製作したいかだを浮かべるプレ活動を実施するなど、試行錯誤を重ねて、各クラスの個性が光るいかだを完成させました。

自然体験活動当日は天候にも恵まれ、無事に活動を終えることができました。振り返りの際には、「一から準備をするのは大変だったが、自分たちで創り上げる喜びを感じた」「仲間と協力してやりきった達成感は何にも変えられない。本当の楽しさを味わうことができた」などと書かれており、子どもが自分で設定した目標を達成できたことへの満足感を見取ることができました。

子どもの主体的な学びを支えるために、教師は何かができるのでしょうか。大切なことは、教師が見通しをもち、子どもに願いをかけることだと考えます。授業や行事を経た先、どんな子どもになってほしいのか、その姿を実現するためにどうすればよいかを教師が具体的にイメージし、準備をしておくことが必要だと思っています。これから子どもが本気になって取り組み、達成感を得られるような授業実践、学年行事を考えていきたいです。



製作したいかだで海に漕ぎ出す

川村大樹教諭は、本校に赴任して4年目、今年度は3年の学年主任として活躍中です。

本校では授業や行事などの教育活動を子どもの主体性を活かして展開していますが、それは子どもと教師、また子ども同士の抜群の信頼関係があってこそ成立します。川村教諭は、日々の授業を大切にして、子どもたちとの信頼関係を作っています。

子どもたちの思いをとらえて教材を選び単元を組む。授業での反応、振り返りで子どもの意識の流れを丹念に追う。朱書きや問い返しで思考を深める。次の化学変化を期待して授業をコーディネートする。こうした教師としてごく当たり前の取り組みを、日々丁寧に積み重ねることで子どもたちとの信頼、クラスや学年の絆を強固なものにするのです。

授業でつながる、授業でよりそう。三河の教師が大切にしてきた姿勢をもつ川村教諭のこれからに期待しています。

(副校長 手島 英樹)